

# 米国出張調査報告

## —第一次調査と第三次調査を通して—

植山 淳

書陵部編修課では、「昭和天皇実録」編修のため、これまで四回の海外出張調査を実施してきた。この第一回目は、平成四年度に実施された英国への出張調査である。<sup>(1)</sup>この調査対象は主に英国Public Record Office (現The National Archives)で、大正二〇年(一九三二)の御訪欧関係史料を中心に調査・蒐集してきた。残りの三回は米国であり、幸い筆者はその三回すべてにかかわることができた。本稿ではこの三回分の米国出張調査についてまとめて報告を行いたい。

「昭和天皇実録」は「明治天皇紀」のように日を追って編年体で記されるものであり、編修のために有用な史料は、何より昭和天皇御自身が「いつ何をされたか」を証明しうる一次史料に他ならない。海外調査に関しても、昭和天皇御自身の行動を示す史料蒐集が求められる。<sup>(2)</sup>

ここで昭和天皇の外遊について整理しておきたい。昭和天皇は皇太子時代の大正二二年(一九三三)台湾へ、大正一四年には樺太へ行かれていたが、これは当時は国内行啓であることから、「外遊」と呼ばれるものは大正一〇年、昭和四六年(一九七二)の二回の御訪欧、昭和五〇年(一九七五)の御訪米と全三回となる。

第一次の米国調査は、平成一一年度(一九九〇)に実施された。調査者は福井淳主任研究官と筆者である。調査先はバージニア州ノーフォークのマッカーサー記念館、ワシントンDC郊外・メリーランド州カレッジパークのアメリカ国立公文書館(以下、NARAと表記)、ボストンのハーバード大学ホートン図書館の三ヶ所であった。

マッカーサー記念館での調査は、マッカーサー元帥本人に関する史料の大半が既に国立国会図書館憲政資料室で蒐集済みであることから、NHKの報道でも有名になった天皇の独白録・英文版が含まれたマッカーサーの軍事秘書ボナ・フェラーズ准将(Bonner F. Fellers)の文書<sup>(3)</sup>、GHQ民政局次長チャールズ・ケイデイス大佐(Charles L. Kades)の文書<sup>(4)</sup>、戦後、同館館長・マッカーサー記念財団副理事長となり、昭和天皇御訪米の際、元帥夫人ジーン・マッカーサーと共にニューヨークで謁見したマッカーサー元帥の副官ローレンス・バンカー大佐(Laurence B. Bunker)の文書などを中心に調査を行った。またちようど出張直前に刊行された、榊原夏「マッカーサー元帥と昭和天皇」<sup>(5)</sup>に使用されている各種写真の原版をはじめ、写真類も多く見せていただくことができた。

NARAには、昭和五〇年(一九七五)の御訪米関係の史料蒐集を主目的として訪問したが、未だ一九七五年の国務省文書(RG53)は非公開であった。<sup>(6)</sup>そこで昭和四六年(一九七二)の御訪欧の途路、アラスカ御立寄に関する史料を蒐集した。特に同館所収のニクソン大統領文書<sup>(7)</sup>では、御訪欧の際、アラスカ州アンカレッジで行われた当時のニクソン副大統領との会談に関する史料を集めることができた。あわせてワシントンDCでは、昭和天皇御訪米の際の足跡をたどるとともに、スミソニアン協会の文書館で、アメリカ自然史博物館を訪ねられた際の関係史料や、ネイビー・ヤード内の海兵隊文書館において、当時のフォード大統領と大統領専用ヨット「セコイア号」でポトマック川をマウント・ヴァーノンの初代大統領ジ

ヨージ・ワシントンの私邸まで「船遊び」された件に関する史料を調査することができた。ただし結論としては、御訪米に関する基礎史料は、国務省文書の公開を待つが、フォード大統領図書館の調査しかないというものであった。

ハーバード大学訪問の目的は、ホートン図書館にある戦前期最後の駐日米国大使ジョセフ・グルー (Joseph Clark Grew) の日記を蒐集することであった。<sup>(8)</sup> グルーは自ら引退後「滞日十年」をまとめているが、その元となった日記、新聞切抜、書簡類が、日付順にファイルに整理されている。本調査では、そのうち駐日大使に就任した一九三二年以降、一九四五年までの日記部分をすべてマイクロ撮影により蒐集を行った。<sup>(9)</sup>

第二次のアメリカ調査は平成二二年度である。調査者は梶田明宏主任研究官と筆者である。この際の調査先は主に、デトロイト近郊、ミシガン州アン・アーバーのフォード大統領図書館、ニューヨーク州ハイドパークのフランクリン・ルーズベルト大統領図書館、フィラデルフィア郊外のハバフォード大学であった。

この調査では、前回、宿題となった第三八代大統領ジェラルド・フォードの大統領図書館調査が第一の目的であった。アン・アーバーという町のミシガン大学敷地内にある。これはフォード大統領が同大学を卒業していることに由来すると思われる。ここで御訪米に関する史料ならびに、それに先立つ大統領の来日に関する史料を調査・蒐集した。ニクソン及びフォード両大統領文書の閲覧を通して、戦後の大統領文書は大きくセントラル・ファイルと称する一番大規模な公的文書、NSC (国家安全保障会議) 文書、大統領自身の私的な文書の三者にわかれており、それ以外に大統領夫人の文書や、大統領の下で活躍した補佐官・高官などの個人史料がおさめられて、全体を構成していることがわかる。<sup>(11)</sup> それぞれ国務省による公開制限のかかったものも少なくないが、可能な限り調査し、少なからず史料蒐集を行うことができた。なお同図書館の展示スペースには、フォード大統領の訪日と、昭和天皇御訪米が大きく取り上げられていた。<sup>(12)</sup>

フランクリン・ルーズベルト大統領図書館の所在地ハイドパークは、ニューヨ

ーク郊外とはいっても、マンハッタンから一五〇キロメートルほど離れており、ボーキーブシという町まで鉄道に乗る。ここでは当初、ルーズベルト大統領が開戦直前、天皇に直接親書を送る計画があったことに関する書類、およびその草案などを入手したいと考えていたが、開戦経緯に関する文書などはほとんど残されていないか、あるいは公開されていなかった。真珠湾攻撃とその対応に関しては、米国連邦議会で公聴会が開かれ、大部な「報告書」が刊行されている。これは大統領図書館にも収められていたが、同「報告書」に使用されている一次史料はほぼ国務省文書によるものと思われた。また大統領夫人のアンナ・エレノア・ルーズベルトの文書は、彼女が戦後、国連の人権委員長や米国代表として活躍した時代のものが多数残されている。<sup>(13)</sup> なお今回は調査できなかったが、同政権の財務長官ヘンリー・モーゲンソー (Henry Morgenthau) の膨大且つ詳細な日記があり、それが内容別に整理されカード化されていた。

ハバフォード大学は、すぐ近くにある女子大のプリンモア大学と共に、いわゆるクエーカー系の大学である。クエーカーは、日本では「普連土」教会として知られている。この図書館には今上陛下の家庭教師エリザベス・グレイ・ヴァイニング (Elizabeth Gray Vining) の史料<sup>(14)</sup>が残されており、この調査が目的であった。本史料は「昭和天皇実録」編修にとっても大変貴重なものであったが、その約半分、特に日本の皇室関係史料の多くは、ヴァイニング夫人自身の遺言によって「一九五〇年時点の日本の皇族が全員亡くなるまでは公開しない」とされ、非公開となっていた。<sup>(15)</sup> なおここには同じくヴァイニング夫人の帰国後、今上陛下に英語を教えたエスター・ローズ女史 (Esther B. Rhoads) の史料もあり、調査を行うことができた。ここでの調査に際しては、特に同大学の日本人教師・小池代子先生に大変お世話になったことを付け加えておきたい。

第三次の米国調査は平成一五年度に実施した。調査者は高橋勝浩主任研究官と筆者である。今回の調査先は、カリフォルニア州サンフランシスコ郊外にあるスタンフォード大学フーパー研究所、ペンシルヴェニア州カーライルのアメリカ軍

事史研究所、ワシントンDCのジョージタウン大学およびNARAであった。調査に先立ち、前二回と大きく異なる点は、インターネットの急速な普及によって、調査準備の段階で各機関の史料所蔵状況が日本国内からでも広く調べることができたことである。

まずスタンフォード大学フーバー研究所であるが、この所蔵史料はOAC (The Online Archive of California) というホームページで詳細に知る事ができる。ここには東アジア・太平洋の各地域に関する史料を中心に、外交官の史料も多く所蔵され、日本関係では国務省極東部のスタンリー・ホーンベック (Stanley K. Hornbeck)、『ジョセフ・バラントイン (Joseph W. Ballantine)』、『マックスウェル・ハミルトン (Maxwell M. Hamilton)』等の史料がある。またグルー大使の下、駐日米国大使館参事官であったユージン・ドゥーマン (Eugene H. Dooman)、『その下の事務官で、後に日本駐在公使となったジョン・エマーソン (John K. Emmerson)』などの史料もある。また「昭和天皇実録」には直接的な関係は少ないが、GHQ参謀第二部長ウィロビー (Charles A. Willoughby)、『同くGHQ天然資源局長スケック (Hubert G. Schenck)』、『占領期から朝鮮戦争期一貫して第八軍参謀長であったクローヴィス・バイアース中将 (Clovis E. Byers)』の文書 (日記) 等もある。

上記のほか、第一次対日教育使節団団長で、宮中晩餐会の席上、昭和天皇御自身から直接、皇太子の家庭教師探しの依頼を受けたジョージ・スタッター博士 (George D. Stoddard) の文書<sup>(18)</sup>なども調査した。

その他、同研究所では古書店で購入したと見られる日本語の史料も多数所蔵している。East Asian Collectionとしてまとめられているもので、荒木貞夫関係文書、平沼騏一郎関係文書、李王職長官篠田治策の関係文書などが入っている。特に平沼騏一郎関係文書は、国立国会図書館に収められているものと対となるもので、大変貴重な史料といえる<sup>(19)</sup>。

続いて訪問したのが、アメリカ陸軍軍事史研究所である。ペンシルヴァニア州の中部、スリーマイル島原発にもほど近いハリスバーグ近郊カーライルにある。

この陸軍戦略大学<sup>(20)</sup>の一角にArmy Military History Institute (陸軍軍事史研究所) が設置されている<sup>(21)</sup>。ここにはマッカーサー元帥の後任、連合国軍最高司令官リッジウェー大將 (Matthew B. Ridgway) の約五〇箱にも及ぶ文書があり、これを調査することが目的であった。リッジウェーについては、日本ではあまり研究されていないが、その経歴は華々しく、第二次大戦開戦時にはペンタゴンの戦争計画部におり、一九四二年第八二空挺師団長としてシチリア、ついでDデイでのパラシュート降下作戦を指揮するなどアイゼンハワー麾下の重要な将軍としてヨーロッパ戦線で活躍した。戦後、カリブ海域陸軍司令官を経て、一九五〇年、ウォーカー中将戦死の後、第八軍司令官となって朝鮮戦争を戦い、一九五一年マッカーサー解任の後を受けて連合国軍最高司令官兼米極東軍司令官となる。翌年にはアイゼンハワーの後を受けてヨーロッパの連合国軍総司令官に転身。さらに翌五三年には米陸軍参謀総長となっている。

このように日本には一年程しかいなかったリッジウェーだが、昭和天皇には計七回会見・謁見している。連合国軍最高司令官としての「会見」となった最初の二回は、米国大使館で行われ、通訳は日本側一名のみという、マッカーサーと全く同じ手法である。マッカーサーの天皇会見については、第一回は公式記録が、第三回は幣原平和文庫の中にその記録が残されているが、それ以外は大まかな内容程度しかわかっていない。さらにリッジウェーの時期は、通訳は一貫して松井明が勤めているが、松井の手記<sup>(22)</sup>を除いては史料が全くなく、今回、その調査が第一の目的であった。今回の調査で、リッジウェーは昭和天皇との会談記録を残していたことは明らかになったが、結局、この史料を発見することはできなかった<sup>(23)</sup>。その他、一九四九年から一九五一年までマッカーサー麾下のGHQ参謀長 (四六年～四九年は副参謀長) を勤めたアーモンド中将 (Edward M. Almond) の史料があった。この人物についても、朝鮮戦争についてはもちろん、占領期日本に関しても少なからざる役割を担ったものと考えられるが、ほとんど研究されていない。アーモンド中将には日記が残されているという事でかなり期待をしたが、日記は一九四六年の一年分だけであった。とはいえこれは占領行政を考える

上でかなり重要な史料だと思われる。なおこのハリスバーグでの調査に際しては、デイキンソン大学図書館員の Satsuki Swisher 氏ならびに同氏の夫で退役海兵隊中佐 Charles E. Swisher 氏に、大変お世話になったことを特に記しておきたい。

次にワシントン D.C. に出て、ジョージタウン大学ロイニング図書館においてグラハム・パーソンズ (J. Graham Parsons) の史料調査を行った。パーソンズは、戦前期にはグルー駐日大使の私設秘書を勤め、戦後も日米外交に尽力した人物である。これについても、同図書館のホームページで、詳細な史料目録が公開されている。調査した史料は、駐日公使時代の一九五三年、ニクソン副大統領訪日に関して作成された史料や、当時の園遊会関係の史料、極東担当国務次官補としてことにあたった一九六〇年の日米安全保障条約の締結に関する史料、グルー時代の回想録などであった。

以上が、三回の米国出張調査の大きな概要と成果である。本調査で蒐集してきた史料は、帰国後翻訳を進め、既に一部は「昭和天皇実録」編修に実際に利用されている。ただし蒐集史料には「昭和天皇実録編修のため」という目的を限定して蒐集し得たものや、他目的の利用に際しては原資料所蔵機関への許可が条件となっているものもあり、公開についてはそれぞれ検討を要する。

「昭和天皇実録」の編修にあたって、昭和天皇の足跡を一通りたどることは、最低限の必要な作業であろう。平成二年の事業開始以来、国内に関していえば、全国に及ぶ行幸先に関する調査はほぼ終えている。米国内においても、これまで調査することができたワシントン D.C.、ニューヨーク、サンフランシスコだけでなく、昭和四六年の御立寄先のアラスカや、昭和五〇年の行幸先のウイリアムスバーグ、ケープコッド、シカゴ、ロサンゼルス、ハワイなどの調査も必要だろう。その折、拜謁や謁見のあった米国人で、未だご存命の方もあろう。また昭和天皇と会見した大統領も、フォード大統領だけではない。カーター大統領やレーガン大統領等も面会している。彼らにもそれぞれ大統領図書館があり、ここには確実に昭和天皇との交際を示す史料が残されているはずである。海外調査は、

今後も継続していかなければならない事は論を俟たない。

なお本文中にも一部記したが、この三回の調査は、各資料所蔵機関の担当者のもとより、沖縄県立公文書館米国駐在員の仲本和彦氏をはじめ、列記できない程の多くの方々の協力なしには成立し得ないものであった。あらためて感謝の意を表して、本報告の欄筆としたい。

註

- (1) 調査者は、当時、編修課主任研究官の佐藤元英氏。
- (2) そこではいわゆる天皇論・天皇制論に関する史料や文献などは二次的なものになる。筆者としては、本事業においてこういった二次的な史料についても可能な限り蒐集すべきとは考えているが、もとより一次史料が中心となることはいうまでもない。
- (3) 東野真「昭和天皇二つの「独白録」」(日本放送協会出版会、一九九八年)。なお本書では同史料は、フェラーズの遺族ナンシー・フェラーズ氏の所蔵となっているが、この後、マッカーサー記念館が同文書すべての複写をとり、利用に供している。ただし、調査時点ではマイクロ撮影はなされておらず、撮影完了後、一括蒐集したいと考え、この時点では一部の蒐集に止めた。以後、一括蒐集は未だ実現していない。
- (4) 国立国会図書館憲政資料室が蒐集している同文書は、メリーランド大学所蔵のものであり、本史料とは別物である。
- (5) 榊原夏「マッカーサー元帥と昭和天皇」(集英社新書、二〇〇〇年一月刊)。
- (6) 現在においても公開されていない。これは国務省文書を全てデジタル情報化して公開しようという米政府の方針により、公開が遅れているためとのことである。なお現時点で一九七三年まで公開されている。
- (7) 大統領文書は、第三二代フーバー大統領以降、各大統領ごとの専門図書館が、NARA の支部施設として、それぞれ大統領の出身地などに設置され、そこで公開されている。唯一、第三七代ニクソン大統領だけは大統領図書館が設置されておらず、その文書は NARA で見ることが可能となっている。
- (8) Joseph C. Grew, *Ten Years in Japan: A Contemporary Record Drawn from the Diaries and Private and Official Papers of Joseph C. Grew, United States Ambassador to Japan, 1932-1942*. (New York: Simon and Schuster, 1944) ショセフ・グルー著・石川欣一訳「滞日十年」(毎日新聞社、一九四八年)。
- (9) この史料については中村政則氏が、すでに「象徴天皇制への道」(岩波新書、一

九八九年)で紹介している。

(10) 現職アメリカ大統領の来日は、昭和四九年(二卷) 十一月八日のフォード大統領来日をもって嚆矢とする。

(11) 国立国会図書館で一部閲覧できるトルーマン、アイゼンハワー両大統領文書や、後述するように、三回目の米國調査で立ち寄ったフランクリン・ルーズベルト大統領図書館においても、史料群の構成は基本的には同じである。

(12) 各大統領図書館には、博物館施設を併設しているところも多く、後述のフランクリン・ルーズベルト大統領図書館には、大規模な展示施設が併設されていた。ただフォード大統領の博物館施設は、同じミシガン州ながら一八〇キロメートルほど離れたグランドラビッツという町にあり、図書館には簡単な展示コーナーがあるだけである。

(13) アンナ・エレノア・ルーズベルトは、同活動の一環で、昭和二八年(二卷)来日。同年六月二四日、昭和天皇・香淳皇后に謁見してゐる。

(14) ウォーミングトンには、Elizabeth Grey Vining, *Quiet Pilgrimage* (Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1970) ウォーミングトン著、秦剛平・和子抄訳『天皇ごわたし』(山本書店、一九八九年)がある。また明星大学戦後教育史研究センター『戦後教育史研究』等の、土持ゼーリー法一氏による一連の研究も参考になる。

(15) ウォーミングトン夫人の遺書の一部を拝見させて頂くことができた。重要な記述であるところから、本フォード大学の許可を得て、関係部分のみ、ここに転記しておく。

I give and bequeath to HAVERFORD COLLEGE, Haverford, Pennsylvania, all of my papers and such books as they desire to have together with the sum of [ ] to be used to defray at least part of the cost of cataloguing said papers. I direct that these are to be used by serious students at the direction of the curator of the Quaker Collection at Haverford College. I further direct that they are not to be published during the lifetime of any member of the Japanese Imperial Family who was living in the year of 1950. After the death of the last member of the family, they may be published only if the interests of both truth and international friendship seem to be served by such publication, and I further direct that the decision to publish is to be made by the curator of the Quaker Collection at Haverford College. In addition, I give and bequeath all my personal copies of the books that I have written to HAVERFORD COLLEGE.

(16) ウォーミングトンの文書は陸軍軍事史研究所やマサチューセッツ大学にもあるが(共にマ

ッカーサー記念館にマイクロフィルムによる写しがある)、この史料はそれらの片割れと思われる。ここではゾルゲ事件関係の史料が中心である。

(17) 占領政策研究上は、大いに使える史料であろう。「昭和天皇実録」との関係で言えば、昭和二四年(二卷) 一〇月、日本橋三越で総司令部天然資源局・経済安定本部主催の「日本の資源計画展」が実施されるが、同月二〇日、同展覧幸啓の際の史料が含まれていた。

(18) ここからは今上陛下の家庭教師がウォーミングトン夫人に決定する経緯が詳細にわかる。なおこの史料は、すでに国立教育政策研究所によって蒐集されている。また同氏には、自叙伝、George D. Stoddard, *The Pursuit of Education* (New York: Vantage Press, 1981) がある。

(19) ただし一部火にあたっていて、かなり痛んでいる。なおこれらについては東京大学加藤陽子氏によって整理がおこなわれている。

(20) Army War College. 米陸軍には有名な士官学校ウェストポイント(Military Academy. 一七三三才の米國市民であれば誰でも入れる)、中級士官の入る指揮幕僚大学(The Command & General Staff College) があるが、この陸軍戦略大学こそ陸軍の最高学府で、上級士官(並びに戦略上リーダータる責任のある民間人)を対象とした組織となる。概して指揮幕僚大学は大尉一少佐級、ここは佐官級が学ぶの場である。なお日本からは、陸上自衛隊から毎年一名が留学している。

(21) 同所にはGeneral of the Army Omar N. Bradley Museumが併設されている。

(22) 「昭和天皇通訳・松井明の手記」(『朝日新聞』二〇〇二年八月五日付・朝刊)。

(23) 「昭和天皇通訳・松井明の手記」(『朝日新聞』二〇〇二年八月五日付・朝刊)。

なお同文書については、豊下権彦「昭和天皇・マッカーサー会見を検証する―『松井文書』を読み解く―」(『論壇』二〇〇二年一・一二月号)が詳しい。

(24) リッジウェーは昭和天皇との会談をテープに録音していたという。その後、信頼できる秘書にテープ起こしをさせ、そのテープならびにテープ起こしの際のノート類はすべて破棄し、完成品ひとつだけを手元に保管していたという。昭和天皇崩御後、リッジウェーはこの会談記録も同所に収めて公開しようとしたが、国務省の指示により公開は差し止められたという。この経緯を示す文書が、閲覧した史料中に残されている(Matthew Bunker Ridgway Papers, Box 5)。なおリッジウェーは一九九三年に没した。リッジウェーは回顧録 *Matthew Bunker Ridgway, Soldiers, the memoirs of Matthew Bunker Ridgway, as told to Harold H. Martin* (New York: Harper and Brothers, 1956) がある。